

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

『復活伝』

～40年ぶりの閃光を～

かたおか徹治



「うわっつ、懐かしい〜!こんなの描いていたんだ……!」
玄関先で思わず顔がゆるんで、それらの封筒を手にしていた。
『ミラーマン』『アイアンキング』『ダイヤモンドアイ』『ゼロ
テスター』『ストラダ5』……。

どれもデビューして間もない頃のコミカライズの作品達だ。

長年住み慣れた家からそう遠くない所に越して来たのは、ちよ
うど梅から桜に変わる頃だった。まだひと月も経ってないが、
夜はまだ寒い。

引越しの整理がやっと落ち着いて来たので、戸外に置きっ放し
になっていた段ボールを開いたら、彼らが出て来た。



40年程前……、その年の冬に本格的に大阪から上京し、夏を
迎える。ボクが二十歳になろうとする頃……。初めての依頼原
稿の下書きを学研に見せに行った帰り道、顔見知り……と言っ

ても名刺を貰ったきりのU編集者さんに、アポ無しで会いに、小学館の学年誌編集部に寄る。

この頃の小学館、いや他の出版社もそうだったが、アポ無しで簡単に持込を受け入れてくれた良き時代だった。

おだ氏の影響か、世の中フオークソング全盛期で、Tシャツ・Gパン・裸足に下駄履き姿で、その後暫く通うようになる。

が、さすがに編集から注意され、今度はポッターダウンのパンタロンとジーンズのポックリサンダルを履いて、また暫く通う事になる。

ポックリと言えば、こんな事があった。住居のある成増から池袋まで行き、東口から一橋行きのバスに乗り小学館まで届ける。これが当時のボクの通勤ルートだった。国鉄に乗り継ぐよ

りも、一番安くついたからだ。

ある日徹夜で原稿を上げ、東上線池袋駅から降りる階段の途中の踊り場から、足を滑らせ下まで転げ落ちてしまった。十数段あったと思う。

回転しながら「キャーッ!」とか「大丈夫かー?」と言う声が周りから聞こえていた。徹夜明けでも冷静なんだなあと、そんな事を転げながら思っていた。そして、何事も無かったかのように立ち上がり、振り返りもしないで脱げたポックリサンダルを履き直し、颯爽と東口目指して歩いて行った。幸い原稿も折れ筋ひとつ無く無事だった。実際痛みも何も感じなかった。その時は……。

痛みは数十秒経ってスグにやって来た。足首が痛み出し、結局苦痛に耐えながら帰路につく事になる。勿論、その後数日間は外出することさえ出来なかった。

いまや上から下まで『しまらー』だが、当時、少しは流行（ながれ）に敏感だった頃のバカ業の一つだ。嗚呼70年代……！

話が逸れたので戻す。

「小学一年生」編集部のデスク、Uさんがボクの顔を見るなり手を振り、「いい所に来た、片岡君！」

そう言つて、「小学三年生」編集部デスクのYさんを紹介された。何事が起きたのか、キョトンとしたままイスに座らされ、

「あのさ、困つてんだよお。ん、女と逃げちゃつてさあ……」と、その後何かとお世話になる事になるYさん独特の勿体振った口調で……。

エエツ？何い？どつかのドラマで聞いた様なセリフ……。

どうやらある漫画家さんが連載の途中に、女性と一緒に雲隠れしてしまい、編集部としては非常に困った状態になっていると言う事だった。

業界で言う……『逃げる』、『穴を開ける』と言うやつだ！ ナマで聞くのは初めてだ……には違いないのだが……。『落ちる』は数年後には、担当さんから散々聞かされ、脅される事になるのだが……。

話はまた逸れるが……、その前の年にボクは『逃げる』側の立場にいた……。

テレビドラマにもなったA書店の週刊誌連載の野球漫画の作家O先生が、メ切に追われS学館の学年誌での連載野球漫画を優先し、週刊誌と同じA書店の月刊誌で連載していたSF漫画

から『逃げた』のだ。

O先生は当時売れっ子で、週刊誌1本と月刊誌2本の連載を持っていた。その日、O先生は何やらブツブツつぶやき、奥さんともヒソヒソ話。

仕事も佳境に入った夜明け前、S学館の原稿がまだ途中の段階で、

「逃げるぞー!」

急にそう言うと、3人のアシスタントに道具を準備させ、タクシーで一路『一橋寮』へ!

『一橋寮』(いっきょうりょう)その後、『ホテル一橋』に改名)はS学館のカンヅメ御用達旅館で、古ぼけた……いや失礼、歴史ある旅館のようで、近代化しつつある都内には似合わず、そこだけがタイムスリップしたような様相だっ

た。(その後、内山まもるさんが『小学二年生』

9月増刊号で100頁の大作『かがやけ!ウルトラの星』を執筆の際、ボクがお手伝いで駆出され仕事をしたのが『ホテル一橋』)

随分詳しいと、お思いでしょう?

そうなんです。

その3人のアシスタントの1人がボクだった。(同じホテルで、ボクはカンヅメを二度も経験してしまった!)

その年の春、短大入学と同時に、高校生の頃から通っていたTAKO先生のアシスタントに決まっていたのだが、連載も4月からと言う事で、ひと月程時間が出来たので、修学旅行以来の東京に持込原稿(その年の年末に完成する32頁のSFミステリーの下書き。翌年、その年が

最後になった『講談社少年少女漫画大賞』に選外佳作)を持って上京したのだ。

持込の前に、中学時代からファンレターを出していたO先生にご挨拶をと伺ったところ、お仕事の真つ最中で、

「よし、一丁揉んでやるか」と、作品を手伝わせて頂く(?) 羽目になってしまった!

こうして上京早々、アレよと言う間にアシスタントデビュー、おまけに『逃亡者』と言う汚名まで背負い込んでしまった。

そしてO先生が人物のペンが終わった頃、アシスタント2人を『一橋寮』に残し、途中で月刊誌編集部とも話合いが着いたようで、自宅仕事場に戻り、無事SF漫画を描き上げた(その時の作品の原作者が、数年先に『劇画村塾』で

1期生として学びを乞う事になる『小池一夫師匠』である)。

結局ボクは持込も出来ず、約2週間のへビーなアシスタント体験をし、帰阪する事になる(O先生とのエピソードは、もつと悲惨な後日談もあるが、別の機会に……)。

脱線してしまったので、話しは戻る。

Yさんは新米編集者のSさんと一緒に、ボクが持っていた描きかけの原稿と、わずかなイラスト見本を見ながら、

「○○日までに、これ上げる自信……ある?」

そう言ってボクの顔を覗き込む。

ええっ? これって代筆……!? 小学館でえ

……!? 思わず耳を疑ってしまったが、確かに

Yさんはそう言った。

その時ボクの周りには、Uさんとイラストレーターレーターの山屋魔秀美さんも加わり、さしずめ強者4人に囲まれた弱者1人と言った状態で、身が縮まる思いだった。

持っていた学研の原稿は、9月号の読み切付録とは言え32頁で、メ切までひと月も無い。

この仕事は、それ以前のメ切！

ええっ？ そんなん出来んのお……？

無茶

やでえ！

山屋さんは中々低学年誌を中心にメカや怪獣もので活躍されていて、彼が描いた『怪獣図解入門』（小学館入門百科シリーズ18）の見本本が出来たので、Uさんを尋ねて打合せに来られていたのだ。

上京早々ヒョンなきっかけで、山屋さんの『怪獣図解入門』の絵を手伝う事になり（この時、

担当だった小学館のUさんと知り合い名刺を貰うくボクとkinakan氏が泊り込んで十数点描いてます）、それが縁で飲み誘って頂いたり、着色を教えて頂いたり、ボクが食えない頃随分お世話になった方々のお一人だ。

そんな山屋さん、

「やつちやいなよ！忙しくなったら、ボクが

手伝ってあげるよ！」だって……。

ま、それを真に受けた訳では無いが、これは

チャンス！とばかりに、

「期日までに上げてみせます！」

……言っちゃった……！

その後、山屋さんの助けは勿論受けられず、TAKO先生の所で同じ釜の飯を食った、kinakan氏に頼み込んで手伝ってもらい、何とか上げる事が出来た。（感謝！）

それが当時円谷プロ制作のテレビ特撮ヒーロードラマ『ミラーマン』である。

ボクはこの作品と出会い、その先数年間、特撮ヒーロードラマのコミカライズを手がけることになる。そしてそれが『ウルトラ兄弟物語』へと繋がる……。



『怪獣図解入門』小学館発行

◆◆◆◆
段ボール一杯の昔の原稿……。

引越してひと月も経つのに、未だ整理出来ず戸外に放置したままだった作品達……。

昔の原稿……、それもデビュー前後のもの

……。

それ以降のウルトラまでの原稿は、荷造りの際、残念ながら置き忘れたようだ。引越し準備は『3・11東日本大震災』の日を挟んでやっていたが、何せ月初めに退院したばかりの静養の身。思うように捗らず、引越し間際は何を残し、何を運び出すのかも分からない迷走状態だった……。

その後のオリジナルやコミカライズ作品群を入れた段ボールは、残置物処理業者の手により、

いまや土の中……。

置き忘れて来た掲載誌を、まさかYahoo
O!オークションで探す事になろうとは……。

せめて残った彼らだけでも……。

恐らくこれから先、陽の目を見る事が無いであらう、40年振りに目覚めた彼らに、一瞬でいい、わずかでも光を……。そんな想いで今回の掲載となった。出来の云々は度外視、自己満足で良いと……。

最後にこの場を借りて、このスペースを提供して下さった山下、小田両氏に感謝……！

平成23年6月吉日 脱稿

【新つれづれ草第6号（2011年8月14日発行）に掲載した原稿に加筆訂正しました】

あとがき

段ボールを開いたわずか数日後、双葉社版『ウルトラ兄弟物語』刊行の際お世話になった、編集プロ代表I氏からの「DVDの付録に使いたいが、原稿残ってますか？」との打診。

それが同じ箱にあった『アイアンキング』の原稿……。〈特典情報…アイアンキングDVD初回限定で付くそうだ〉

巡り合わせであるんだなあ……と、その時つくづく感じる。小冊子に変身し、メジャー再登場……。

陽の目を見た！ こうやって振り返ってみると、随分やってたんだなあ……、と言うのが改めての実感。